

神学校教育の課題② 霊性を養う



教務主任 福井 誠

神学校教育においては、学生の「霊性」をいかに育てるかを援助する課題があります。一般の学校教育や専門教育と同様に、知識を増やす、技能を向上させることも必要ですが、神学校教育においては、キリストにある新しい価値観、世界観が深められ、成熟させられ、生活化されていく教育が求められています。

「霊性」ということばの理解は人様々です。それは、一般に「宗教的・神的なものを探求する営み」と受け止められています。しかし、神学校

Obi Bible Institute

OBI

お茶の水聖書学院

NEWS

〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台2-1
お茶の水聖書学院
お茶の水聖書学院後援会

教育における「霊性」は、概念化、知性化されたものではなく生活化されたものという理解が重要です。つまり霊性というのは、聖霊の働きによって信仰者の生活が絶えず新しくされていくことに他なりません。いみじくも、インドの宣教師スタンレー・ジョーンズが「もし諸君が今日からイエスのごとき生活をするならば、印度は明日からでも諸君の足下に来るであろう。」(『印度途上の基督』)と語ったように、キリストに倣い、キリストを力強く証しする歩みが、日常性の中にいよいよ確かにされていくことなのです。

しばしば霊性は、情緒的な集会の中に表されるかのように考えられがちです。あるいは講壇や会堂の中でこそ現されるかのように思われているふしがあります。しかし、パウロが「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい(1コリント131)」と語ったように、最も日常的な事柄の中にこそ、それは、表されていくもののなのです。

これは既に教会の現場で教えられていることのように思いますが、神学校において学ぶということは、学びによって聖書理解と洞察を深めると同時に、さらに日常性における霊性の訓練の深さに気づき、そこに自らを置いていくことにほかなりません。

もちろん霊性は神学校教育の3年間で達成されるものではないでしょう。それは一生の課題であるというのでも確かなことです。日々忠実に、祈り、みことばを頂き、従うことはもちろんのこと、よき生活の証をなし、宣教をすることにおいても、さらには、日常当たり前に襲いくる様々な問題を乗り越えることにおいても、絶えず聖書から教えられ(1テモテ416)聖書に密着した歩みを進めていく鍛錬が欠かせないのです。

霊性の訓練が一生涯のものであることを踏まえた上で、なおも神学校教育がその役割を担うために、どのようなカリキュラムと環境作りが必要なのか、少し拘りを持ちながら、尽力したいと思う昨今です。

中越沖地震救援・秋のチャリティー・チャペルコンサート

去る10月27日(土)お茶の水クリスチャンセンター大チャペルにおいて、ベアンテ・ボーマンご夫妻を迎えて、OCC・OBI共催での「中越沖地震救援・秋のチャリティー・コンサート」が開催されました。

当日は台風20号接近という生憎の天候にもかかわらず、120名近くもの方々が集って下さいました。

最初にOBI増田学院長よりコンサート開催の主旨と開会の挨拶がありました。その後いよいよボーマンご夫妻が登場、リンダ・スタッセンの「主に向かって歌おう!」の主への賛美からコンサートの幕は開けられました。「私にとって、チェロは神様を賛美する道具です。神様のためにこのように自分が用いられていることは感謝です!」とボーマン師から冒頭の挨拶がありました。演奏の合間には各曲の解説があり作品の鑑賞理解を一層深めることが出来ました。続いてバッハの「アリア」の演奏です。一段と静まった空気の中で師の奏でるチェロの音色は、私たち聴衆の心に深く迫ってきました。「バッハは楽譜の最後に必ず“SDG”とイニシャルを添えます。それは“Soli Deo Gloria”の頭文字で『神にのみ栄光あれ!』という意味です。バッハは音楽を通して神を礼拝することの大切さを最も熟知していた敬虔な作曲家でした」三曲目はシューベルトのソナタ「アルペジオーネ」です。ルリ子夫人のピアノ演奏とも息の合ったすばらしい名曲でした。4曲目は有名なサン・サーンスの「白鳥」、哀調を帯びた



中にも格調高い旋律はわたし達の心にしみじみと響いてきました。続いて、シューベルトの「蜂」が奏でられました。最後はボーマン師が祈り、「Amazing Grace」を聴衆も一緒に高らかに賛美して心地良い余韻が残る中で演奏会は終了いたしました。

ボーマン師が最後に語った言葉が心に残ります。「この『驚くべき恵み』の歌のように神のすばらしい恵みがなかったならば、今、私はここに立つことは出来ません。」ボーマン師ご夫妻の主への誠実な信仰に裏打ちされた演奏はその音色に深く表されておりました。

また当日は、自然をこよなく愛するボーマン師の山岳写真入賞作の中から3点が同時にロビーに飾られました。同時にOBI同窓生による「長崎キリシタン殉教の旅」の写真・絵画展も共に展示されました。集われたお一人お一人の満ち足りた笑顔が印象的でした。まさに主のすばらしい恵みの中で、感動と感謝の「演奏会と展覧会」の一日でした。

OBI事務局主任

宮本三枝子

【長崎キリシタン殉教ツアーより】



日本の迫害と殉教の歴史実踏旅行

07年度、研究科は日本の迫害と殉教の歴史について学んでいます。前期の学びの総括として、長崎のキリシタン迫害と殉教の遺跡を見聞してまいりました。9月27日から29日まで、増田学院長を先頭に12人が付き従い、生きた信仰の学びができました。

迫害の光・陰・闇を思う

―殉教者と隠れキリシタンと転び者―

三浦喜代子

迫害の嵐は悲しくも信者たちを三種類の群れに分けた。第一は殉教者、第二は隠れキリシタン、そして三番目は転び者（棄教者）である。

旅の一日目、三十度を超す強烈な日差しの中を長崎は西坂の丘に上がった。

二十六聖人のレリーフが力強く建っている。あまりの厳肅さに声も出ない。彼らは京都から極寒の西国路を裸同然で連行されてきたそう。いたい、彼らの胸中を去来するものは何だっただろうと、悲壮な気持ちになっていたとき、ガイドさんの声が耳を打った。

彼らは処刑場が見えてくると、急に早足になり「いよいよ栄光の時が来ました」と喜びの声をあげたというのだ。また「私の十字架はどれですか」と、己が十字架に駆けよって慕わしく口づけたそう。

これにも私は声が出なかった。なんという勇者たちよ、彼らこそ真の勝利者ではないかと、ただ感嘆するばかりであった。彼らは迫害の光ではないか。

おそろおそろ自分に問うてみた。いざというとき彼らのようにできるだろうか。確信など皆無だが願望だけはあ。光りに憧れるのだ。

二日目。平戸から大橋を渡って生月島に渡り島の館を見学した。「納戸神」を目の当たりにした。家の奥の奥の納戸に、薄汚れてよれよれになった手ぬぐいほどの布きれがぶら下がっていた。はげ落ちたマリヤの像がみえた。（観音の容貌だった）これが隠れキリシタンが命がけで守った信仰の対象か。隠れの人たちは、表向きは仏教徒の振りをし、仏教の催事に参加し、死ぬとお寺に葬られた。偽りの生活をしながら、家族ぐるみ集落ぐるみで徳川二百数十年を隠れ通した。私は隠された主を思つて泣いた。

「信仰とは心に信じて義とされ、口で告白して救われる」のではなかったか。彼らには私の貧弱な想像力では描ききれない複雑な事情があったのだろう。しかし、隠れにはなりたくないと思つた。彼らは迫害の陰ではないか。

三日目は長崎外海（そとめ）町にある遠藤周作文学館と『沈黙』の舞台を歩いた。

「人間がこんなに哀しいのに主よ、海があまりに碧いのです」の碑の前で眼下に広がる五島灘をながめた。遠藤は転び者を復権させた。確かに彼らに踏み絵を踏ませ信仰を棄てさせたのは、だれもが持ち合わせている人の弱さであろう。決して海の碧さのせいではないのだ。が彼らは陰よりも深い迫害の闇ではないか。

いざというとき、キリストを否む者にはなりたくないと思つた。強く激しく思つた。

神さまが望まれるのは、はたしてどの群れであろうか。

学窓トピック

聖書科・ネットコース・音楽科

○9月27・29日の日程で、「長崎キリシタン殉教史の旅」が企画、実施されました。団長は、当学院増田誉雄学院長で、参加者13名。キリシタン殉教の地を巡り、当時の信仰をしのぶ史跡に触れ感動を分かち合いました。

○10月27日(土) OCCとOBIの共催で、中越沖地震救援秋のチャリティチャペルコンサートを実施いたしました。8Fロビーにて「長崎キリシタン殉教の旅」写真展が同時開催され、約120名の参加により祝された時を持ちました。日本ホーリネス教団・柏崎聖光キリスト教会(片桐宣嗣牧師)の災害復興のために10万円の献金をさせて頂いていただきました。

○12月6日(木) 恒例のクリスマス会が持たれました。メッセンジャーは当学院の伊藤淑美講師、主イエスのご降誕を喜び祝う時となりました。

○2008年3月卒業生のための卒業研究指導が実施されています。本科生の加茂康一兄、菊田洋子姉、須子都姉、古賀文子姉の4名が、それぞれの研究テーマに取り組み、各専門講師の指導を受けました。それぞれの研究テーマは次のとおりです。

・須子都「ルツ記のゴエールと旧約聖書の贖いの思想について」
・加茂康一「イスラエル王国の誕生からヘロデ王朝までの変遷」
・菊田洋子「すべては愛の実り」
・古賀文子「アウグスティヌス」

なお、ネットコース在籍の方も、修得単位数20単位以上から卒業研究指導を申し込むことができます。進め方については、ぜひお気軽に教務の福井までお問い合わせください。

educationaldpt@obi-net.com

○ホームページが新しくなりました。在校生、同窓生専用ページは現在作成中です。利用できるようにしましたらお知らせいたします。また、図書貸出し準備を継続しておりますので、諸作業のために覚えてお祈りいただければ幸いです。

2008 年度学院生募集

開講クラス【予定】

聖書需要教理／パウロ書簡／魂への配慮を学ぶ／聖書の人物に学ぶ／旧約聖書の思想と概説／キリスト教説教入門／マルコの福音書解説／箴言／日本キリスト教史／聖書カウンセリング／豊かな霊的成長を目指して／聖書における女性／

随時募集中！

・教会音楽専攻／音楽一般コース ・ネットコース：学院生認定／聴講

* お問い合わせ：TEL:03-3296-1005 FAX:03-3296-4641 E-mail:office@obi-net.com

主と教会に仕える 同窓生たち⑧

荒野人生四十年、

第6期生 三浦秀彌

魂の彷徨より救われて

学生時代、私は寮生活をしていた。当然のように唯物思想が語られ、読まれていた。乾いた都会生活、コンクリートジャングル、地獄鍋の東京が嫌で堪らなかつた。三畳一間の部屋で好きな絵を描いて慰めていた。

寮友の青山学院生に近くの西片町教会に誘われたことがある。復活祭の頃だったろうか。

大学の聖研には一度顔を出した事がある。G・ネラン師がおられた。精悍でガツシリした握手が跳んできた。師との出会いはそれ切りであった。白山教会にも一度出席した。礼拝後、逃げるように退席したがそれを超える速さで牧師が追いつき握手を求めた。「再来を」言われたのであろう。クリスマスの誘いの案内

状が来た。行かなかつた事を悔やむ思いを今も所持している。魂の彷徨はまだまだ続いた。

長い8年間のモラトリアムも過ぎ仕事に就いた。一心不乱に仕事した。生活も安定。家も自動車もある予想外の人生となつた。子供たちも健康に育ち、最高学府に入学して、一息吐いていた頃、聖書を手にして読むこともあつた。しかし聖書は墓石のように冷たく心に通うものはなかつた。ところが、ある日、「時熟せり。天の国は近づいた。悔い改めよ。」を聞いたのだ！どこからかと思廻した。誰もいない。天井の隅からだろうか？それは忘れられない魂を貫く言葉であつた。

それから第二放送のラジオで御言葉を学ぶようになった。荒井献・恵泉女学園学長の「イエス・キリストを語る」、新約聖書の解説であつた。次いで井上洋治神父の「福音書を読む」であつた。2年近く聞いたが教会へ

とは導かれなかつた。聖書が少しは分かつた積りになつた。

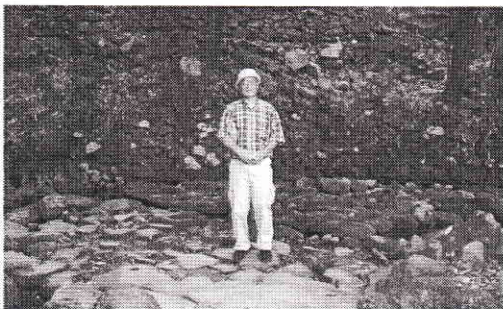
折しも、1994年1月14日午後6時、仕事を終わると直ぐ、独りで後樂園へ足を進めた。「わたしは道、真理、命」の横断幕を目にすることが出来た。ビリー・グラハムのクルセードが開かれて2日目であつた。金曜日であつた。ヨハネ福音書3章が開かれていた。

「肉によつて生まれた者は肉です。御霊によつて生まれた者は霊です。：風は思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くか知らない。御霊によつて生まれる者もみな、そのとおりです」

心の嵐に揺さぶられながら行きつ戻りつ階段を下りていった。カウンセラーが近づいてきて十字架を切つて祈つてくれた。その後導かれた教会で、牧師から「あなたはその時救われたのです！」と言われた。

1994・1・14は私の救いの日、新しく生まれた日になつた。戸籍謄本で知つたが、戦死した父の誕生日でもあつた。どちらも私の初めて知つた喜びの日である。

まもなくして、OBIに入學した。ただ聖書が学びたい一心であつた。学院生活は私の魂を潤して余りがあつた。私は学院生活を謳歌した。卒業後も研究科に在席、現在に至るまで学び続けている。ハレルヤ。



三浦兄は現在、

同窓会会長として八面六臂の大活躍をされ、学院の活動に大いに貢献しておられます。

「有用性よりも存在のしかた」こそ

本学院講師 堀 肇

●中高年には孤独感が

中高年を巡る深刻な心の悩みの一つは、現代社会が中高年にとって生き辛い時代になっているということです。それは自殺率の高さにも象徴されています。年間三万人を超える自殺者の内、六十歳以上が全体の34%でトップです。なぜこのように中高年の自殺が多いのか、その原因や理由は単純ではありません。そもそも中高年期は他の時期と比べて生の条件が著しく異なり、肉体的、精神的な衰えもあり生きるエネルギーが下降します。こうした状態に加え、現代社会固有の強度の心理的・社会的ストレスが背景にあると考えていいでしょう。経済問題はもとより自立が長引く子ども達の問題、また老いを抱えての親の介護や自らの健康問題など、ストレスは重層的です。このストレスというものは厄介なもので、蓄積されますと心身を疲労させ、う

つ状態を引き起こし、心身症はもとより、うつ病発症のきっかけともなります。これらが直ちに自殺願望に繋がるわけではありませんが、留意しておきたいことは現代の中高年はいくつ感情を引き起こすほどの精神的環境下にあることに加え、近年ますます希薄になってきた人間関係が人の心を孤独へと追いやっていく深刻な現実があるということです。このようなうつつ感情と孤独感は心身とも健康な中高年であっても、現代では彼らの誰もが多少なりとも心に抱えている普遍的な感情ではないでしょうか。

●孤独を癒す温かな関係を

人は喪失感や孤独感に陥り、その程度が深まりますと、見捨てられていくような感覚に襲われ、自分の生きる意味や存在価値を見い出せず、精神的な危機にさらされることにもなります。現代はこのような「見捨てられ感」の伴った孤独感

が人の心を覆っている時代と言ってよいでしょう。孤独を巡る問題は若い人たちも抱えています。前述のような様々な問題が重なる中高年にとっては深刻な心の課題なのです。

では、何がこのような孤独感を癒してくれるのでしょうか。それは魂の深い部分で繋がってしてくれる人の「存在」です。人間は本来、関係的な存在であって、独りでは自分自身にさえなり得ないものなのです。人が生存充実感をもつて生きるためには温かな人間関係が必要です。パウロは「あなたがたこそ、わたしたちの誉れであり、喜びなのです」(一テサロニケ二20)と述べていますが、自分の存在を喜んでくれる誰かがいるとき、「生きていてもいい・生きていきたい」という気持ちが起こり、孤独を乗り越えていくことができるのではないのでしょうか。その意味で孤独感が忍び寄る中高年期だ

けでなく、人間が人間としてののちの実感をもつて生きていくためには、孤独を癒す温かな人間関係がどうしても必要なのです。キリスト者の場合はここに「主にあつて」を加えておきたいと思います。

●「する」ことから「ある」ことへ

現代の中高年は孤独の問題に加えてもう一つの課題に直面しています。健康であれば退職してから二、三十年近くも生きる時代になつてきたということです。これは人生全体の時間的割合から言つても大変長いものであり、この期間をどう生きるかは誰にとつても大きな課題です。多くの人たちは、それまで出来なかつた趣味や教養を身につけ、新しい可能性に向かつて挑戦しています。今まで知らなかつた分野を探索するものもなかなかのことです。気づかなかつた才能を発見するようなことも意外に多いのではないのでしょうか。

けれども、この最後のライフステージを「魂の旅」という視点から考えますと、何かを「する」ということだけに停まつてしまふならば、もつたいないというだけでなく人生に宿題を残すようなことになつてしまふのではないかと思います。何か新しいことを「する」こともそれなりに意味のあることですが、人生の円熟期に向かう大切なこの時期の課題は、自分がどんな人間で「ある」かを振り返り、内面的な生活を深めていくことではないかと思ひます。

ポール・トゥルニエは、この時期の人々にとつて重要なことは「彼らが現在どういう人間であるかということなのであつて、彼らがこれから何ができるかということでもなければ、自分で持ち運ぶことができない所有物でもない」と「ある」ことの大切さを強調しています。またこの時期は「人間が行動の炎の中でなし得たよりもつとゆつくりと、ひまをかけて自分の人生を反省し、何が価値あるものかという問いを解こうと試みる時なのです」と内面生活の重要性を語っていますが、傾聴すべき言葉ではないのでしょうか。

●「存在のしかた」によつて

聖書は、この内面性について「年老いた男には、節制し、品位を保ち、分別があり、信仰と愛と忍耐の点で健全であるように」(テトス二・2)と、そのあり方を記してい

ます(年老いた女にも言及)。これらは中高年や高齢者のあるべき姿、言い換えると人格的成熟の重要性を説いたものですが、現代は若さの文化が強調され過ぎてゐるためでしょうか、「八〇歳なのに〇〇が出来る」などといった具合に、マスコミなども「する」ことばかりを称える傾向があるように思われてなりません。

これは、これまで今のような高齢社会が存在しなかつたため生き方のモデルがなかつたことによるのかも知れません。ことに効率主義、生産性至上主義の高度成長時代を生き抜いてきた世代の人たちは、何かをやつていないと落ち着かないという生き方になつてしまつてゐるようです。これでは趣味も娯楽も仕事の延長線上の競争に近いものになつてしまひます。身についた行動パターンは修正が難しいかも知れませんが、神谷美恵子が『こころの旅』の中に記しているように、「有用性よりも『存在のしかた』そのものによつてまわりの人びとをよろこばす」ような「人生の秋」としたものです。

OBI会計報告

主の御名を賛美いたします。いつもOBI会計のためにご支援、ご加禱を賜りありがとうございます。第7期9ヶ月間(2007年3月1日～2007年11月30日)の収支状況を表のようにご報告いたします。聖書科、音楽科ともに着実な活動を続けております。

昨秋、ボーマン先生をお招きしてのチャリティーコンサートはいへん祝され恵み豊かな時となり、中越沖地震で被災した教会に救援金を贈ることができました。

昨年春には、教室と事務所・教師室が2階に統合されて利便性が向上し、学院全体に活気がみなぎ

つてきていることは大きな感謝です。

新年度に向かつて、学院の充実のために教員・スタッフとも一致協力していっそう努力してまいりますので、今後ともご指導ご支援をお願い申し上げます。

(財務理事 平松庸一)

◎OBI後援会献金御芳名録

▽後援会維持会員

有田貞一 有田美栄子
飯島多稼夫 猪狩友行
小野沢恵子 金本悟 木下順子
国東恵子 窪井節子 窪田淳子
小林喜久男 斉藤とし子
佐藤敬 佐野謙次 佐野寿美子
須子都 関節子 世良田湧侍

▽冬季特別献金(個人)

高野富男 島田裕子 米田由起子
恩田千恵子 中島總一郎 福井誠
増田誉雄 吉田加代子 小林亘
吉村瑠美子 三浦秀弥
世良田湧侍 加茂康一・早苗
大淵せつ 加賀谷紀子 杉山礼子
宮本三枝子 宮内芳枝 脇坂勇
野田秀 窪井節子 国東恵子
黒沢すぎの 田中美枝子

▽後援会協力会員

(個人) 植木朋子 近藤はるみ
羽鳥明 脇坂勇 山口勝政
(団体) 中山キリスト教会

田中恵子 中川和代 浪井弘子
西満 平松庸一 福井誠
藤原導夫 増尾善文 増田誉雄
松岡常子 三浦喜代子 三浦秀弥
宮本三枝子 目崎由紀子
森登 森本馥 依田和子

窪田淳子 山本しづか

伊地智恵子 鈴木芳宣
藤原導夫・智子 森本馥
伊藤洋子 内藤真奈 堀口容子
梅澤近子 平田仁美 尾原光彦
(団体) 腰越独立教会
大峰バイブルホーム

クリスマス献金

(個人) 飯島多稼夫 宮本三枝子
(団体) 市川北バプテスト教会
OBIクリスマス感謝会

指定感謝献金

(個人) 佐野謙次(OBI半期感謝)
西満(病氣回復感謝)
福井誠(感謝)
宮奈登美子(教音デー会費分)
伊地智恵子(教音デー会費分)
(団体) 子供のための祈り会

【報告】OBI・OCC共催

コンサート(中越沖地震救援) 136740円(内費用、36740円)を除き100000円を柏崎聖光キリスト教会へ奉げさせていただきます。

OBI 第7期収支報告

2007年3月1日～2007年11月30日

当期収入	
授業料収入	6,165,017
行事収入	968,100
献金収入	8,609,196
助成金収入	2,250,000
その他収入	108,569
収入計	18,100,882
当期支出	
学事種出	8,951,072
行事支出	1,006,416
経費支出	9,134,226
その他支出	328,405
支出計	19,420,119
9ヶ月収支差額	-1,319,237

※当該マイナスに対しては、クリスマス献金および後援会献金を充当いたします。

◆今号の献金者リストは2007年9月1日～12月31日までの間に献げられた方々です。